

令和7年度には、子どもが子ども同士の言葉で多様な価値観に触れながら学びを深めていくための研究を1年間進めてきた。結果として、伝え合いたくなる課題設定、対話を生む土台作りについては成果が見られた。しかし、対話を深めるためのつなぎ方、伝えたいことを伝え合える学級づくりについて課題が残った。

そこで、今年度も研究主題、研究領域を継続し、特に「対話を深めるために子どもの言葉をどうつなぐか」ということを重点的に研究を深めたいと考える。

4 研究主題について

伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子どもの育成

～子どもの言葉を大切にした授業づくりを通して～

(1) 「伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子ども」とは

研究主題の「伝え合うことで様々な考えに気づき、学びを深める子ども」とは、「互いの意見や考えを共有することで、自分の考えだけでは到達できなかった視点や価値観に出会い、思考を深め発展させていくこと」と定義する。そのためには、自分の言葉で考えを述べられたり、なかまの発言に反応し、興味を持って聞けたりするような子どもたちの状態が前提となる。授業の振り返りでは、「最初はAだと思っていたが、なかまの考えを聞いて、確かにBの考えもあるな。」「みんなで考えたら、自分だけでは気づけなかったことが分かった。」といったような姿をめざす。教師は「考えの違い」に特に注目しながら、どの子の考えも取り上げながら、対話が広がるように手立てを講じる。

(2) 「子どもの言葉を大切にした授業づくり」とは

「教師が正解に誘導するのではなく、子どもの発言、つぶやきや疑問を起点にした授業」と定義する。そのためには、授業の中に子どもが自分の言葉で語れるような場面が必要である。さらに子どもが安心して話せる状態が必要となる。教師は考える時間を保障し、時には沈黙を受け入れることが大切である。また、子どもと子どもが自分の力で考え、深め合えるように、場や流れを整えるファシリテーターの役割が求められる。子どもが考え続けられるように出場を見極め、問い返したりゆさぶったりしていく。物語文は読み手によって受け取り方が異なる。だからこそ、子ども自身が「自分はこう感じた」と思える読みを見つけていくことに価値があると考えられる。教師は子どもの実態をもとに、どのように読み深めるかをイメージしておくことが必要であるが、方向を押し付けるのではなく、子どもが自分たちの読みを伝え合い、考えて深め合えるよう授業を進める。

研究構想図

